

仲島陽一著

『哲学史』

(行人社、二〇一八年)

評者・島崎 隆



本書は古代から現代までの哲学史の著作である。哲学の分野としても、世界観、人間論、自然哲学、倫理学、価値論、認識論など、なるべく全体にわたるように叙述されている。本書は支配と抑圧の時代状況と当時の哲学の関わりをつねに視野に入れており、この点で、唯物論的な批判的観点に立っているといえる。唯物論からの西洋哲学史の著作といえ、かつて玉井茂『西洋哲学史』上・下(青木書店)などがあるが、本書はこれに次ぐものであろうか。

こうした哲学史を展開できるということは、著者がなみなみならぬ力量をもっていることを示すだろう。だがとくに、著者は倫理学が専門であるので、その方面が充実しているという印象である。西洋哲学史の著作ではあるが、ところどころ東洋思想や宮沢賢治が顔を覗かせていて、それもまた面白い。だが、哲学史を書くことはむずかしい。フランス哲学を専門としながらも、哲学史全体にチャレンジした氏のやる気を讃えたい。男女同権を唱えたとされるラバール『両性平等論』についてなど、評者は本書の多くの箇所、有益な知見を得ることができた。

著者によれば、ルソーは人類の思想史において、いわばイエスとマルクスの中間に立つ最大級の思想家である。フランス哲学の専門家として、著者はデカルト、パスカルを初めとして、デイドロら百科全書派の叙述についても興味深く展開する。さらに著者は、ドイツの哲学者ヘーゲルについても、「最も偉大な哲学者である」と高い評価を下す。ただ彼の自然哲学が「労多くして実り少ない部分である」というが、ここからエンゲルス『自然弁証法』へと継承される面があるので、思弁的であるとはいっても、もう少し評価されてもいいのではないかと思われる。

そして科学的社会主義の創始者マルクスについても詳論される。アルチュセール、廣松渉らを批判して、著者は、マルクスが人間の本質、本性を否定せず、それが歴史のなかで変容し、疎外されると考えた、と主張する。賛成した点である。通例の哲学史とは異なり、剰余価値学説など、マルクスの経済学的部分も具体的に説明するのは興味深い。ここまで展開するならば、ソ連・東欧の社会主義の崩壊についても一言述べてほしかったと思う。また近代哲学に関しては、ライプニッツ、スピノザへの評価が低いようである。スピノザは近年、政治思想の方面から高い評価を受けている。

さて、現代思想の入口としてのニーチェ、ハイデガーについては、著者は生き生きと対決していて、胸がすくよう

また過去の哲学者たちが現代的観点からどう評価されるかが、著者の視点から大胆かつ率直に描かれるので、この点でも興味深い。「偏ることを恐れるな」というのが、著者のスローガンなのである。本書は、「初期ギリシャ哲学」から古代・中世哲学までに九〇頁、「ルネッサンスと宗教改革」「デカルト」から「ヘーゲル」「キルケゴールとフォイエルバツハ」までの近代哲学に一五〇頁、「マルクス」「ニーチェ」から「二〇世紀の哲学思想」までの現代哲学に七〇頁を割いており、哲学史的にバランスが取れているといえよう。

古代・中世哲学では、アリストテレスに関わって、生産への蔑視が古代の奴隷制に結びつくとするれば、経済価値の過大評価が近代の資本主義に結びつくはずばり指摘する箇所や、ストア派に託して述べられた著者の死生観、自殺論が興味深い。著者はイエスが人への愛と救いを強調する点を高く評価したりして、キリスト教には一定の思い入れがあるように感じられた。

近代では、ルソーについての叙述がとくに充実している。著者は最近、『ルソーと人間の倫理』(北樹出版)を出しており、旺盛な執筆活動を続けている。当時、ルソーが音楽家としても名声を博したとは知らなかった。ルソーは啓蒙主義のもっとも重要な内在的批判者であり、土地の私有によって人間は邪悪になったという疎外論を説くとされ

である。ニーチェは戦争好きで、普通選挙や民主主義を敵視し、弱者を差別し、資本主義批判もなく、「金髪野獣」による暴力を肯定する「最悪の思想家」である……。たしかに以上の評価は、ニーチェ自身の著作から取り出されているのだ。ハイデガー批判も同様に容赦なく、彼が「二十世紀最大の哲学者」といわれることもあるが、むしろ「二十世紀の迷妄の一つ」といったほうがいいとされる。奥谷浩一『ハイデガーの弁明』(粹出版社)など、批判的研究が進み、最近のハイデガー『黒ノート』の出版によって、ハイデガーが反ユダヤ主義でナチスに加担していたことがますます明らかになってきた。

本書の最後は「二十世紀の哲学思想」として、ここでは、デュレイ、ベルクソン、分析哲学、アドルノ、サルトル、さらにヤスバース、アレント、ポパー、ソシュール、フーコー、ハーバマース、ポストモダン(バルト、デリダら)、ローティらが列挙される。まさにここは力業である。これから現代思想の総括的説明があればありがたかったと思われる。哲学に興味がある人は、哲学史の著作をもっていると、その全体的流れを参照できるので便利なものだ。その点で、しっかりした典拠に基づき、明快かつ簡潔に展開された本書はお勧めできる一冊である。

(しまぎ たかし・東京唯物論研究会会員)